

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03578

研究課題名(和文) 欧州統合史の枠組での近代初頭ヨーロッパ社会経済構造の分析

研究課題名(英文) Study on the European socio-economic structure from 15th to 17th century within the European Integration framework

研究代表者

奥西 孝至 (Okunishi, Takashi)

神戸大学・経済学研究科・教授

研究者番号：20211815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では中世末期から近代初頭(15～17世紀)のヨーロッパ社会経済の特徴について中心地域であった低地地方を中心に欧州統合史の枠組みでの再検討のために、穀物、熱帯産品、毛織物、美術品の4種の財の流通のあり方および価格決定のプロセスについて分析し、諸都市の美術品市場のあり方ならびに美術品の価格決定メカニズム、ネーデルラント内における穀物価格等にみられる中心的都市と周辺の中小都市の間の価格動向の差異、価格決定メカニズムが異なる多元的流通構造を有する穀物と単一的流通構造をもつ特産財などの他の財の諸財および貨幣、情報の集積と分散における時間的ラグの影響について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Purpose of this research is to put the European socio-economic structure from 15th to 17th century in the long-span European Integration framework. I focus on the change of structure and function of the low countries as the economical center in that period, where there we could observe some kind subsidiarity and co-existence of cultural - linguistic diversity and political - economical uniformity that Europe Union trees to achieve. To examine the change of structure and function of the low countries I analyzed the difference of price decision process among products; grain, tropical foods, textile and arts that had different circulation pattern. I plan to publish one book and two papers based on this research and I attached a file of abstract of these works.

研究分野：経済史

キーワード：市場経済化 中近世ヨーロッパ 低地地方 中心性

1. 研究開始当初の背景

中世盛期以来のヨーロッパ有数の商工業地域であったフランドレン、プラバントさらに17世紀に急激な発展を遂げるホラントなど北部諸州がある低地地方は、ブリュッヘ、アントウェルペン、アムステルダムという15、16、17の各世紀の商業金融の中心都市が位置した地域でもあり、H.Pirenneに代表される古典学説において、中世以来の都市の商工業的繁栄とともに15世紀までの同地方の最重要地域であったフランドレンにおける君主にも対抗する有力な特権の大都市のもつ強権的制度、15世紀後半に重要性をますプラバントにおけるアントウェルペンの取引所に代表されるより自由な制度、16世紀後半からの反乱の後、北低地地方が独立したネーデルラント連邦共和国(オランダ)の近代的な自由という、制度的な中世的規制から近代的自由への移行が目目されてきた。オランダの近代性については J.de Vries & Ad Vad der Woude, Nederland 1500-1815, 1995 などその初期的特徴に焦点をあてた研究が行われるとともに、J.L. van Zanden を中心とするユトレヒト大学グループなどにより、市場経済化ならびに地域統合化(グローバル化)の端緒として同時期を始まりとする長期的時系列分析を用いた研究が進められてきた。ただし、北部オランダの「黄金時代」は短く工業化にも遅れたのに対して、南部は一時経済的な重要性を失いスペインなど他国の支配が続いたものの大陸も最も早期に工業化を成し遂げ1831年にベルギーとして独立するなど、多くの点で対照的な特徴をもつ二つの国家へと発展したため、それぞれの国の特徴的な現象の解明に重点がおかれ、中世末期からの近代初頭についても中心の移行とともに南北低地地方の経済構造の差異が研究の焦点となってきた。しかし近年、B. Van Bavel, *Manors and Market: Economy and Society in Low Countries, 500-1600*, 2010, W. Blockmans, *Metropolen aan de Noordzee: De Geschiedenis van Nederland*, 2011, O. Gelderblom, *Cities of Commerce: The Institutional Foundations of International Trade in the Low Countries, 1250 - 1650*, 2013 と、両国での研究成果を包括して南北低地地方を一体として変化を長期的にとらえる研究により、中世末期から低地地方内の諸地域は相互に関連するなかで機能を分担しながら発展し、低地地方内の中心都市も相互につながりながら、その規模と機能を拡大させながら中心地としての役割を継承し、同時に、市場経済化および地域統合を促進する社会経済構造や経済的な自由を保障する制度を可能にするボトムアップ型の政策決定構造が発達したことが明らかにされてきた。しかも、これらの研究で中世末期から近代初頭の低地地方の社会経済構造の連続的な発展が明らかにされてきたこ

とで、従来の低地地方史研究が明らかにしてきた南北低地地方、16世紀と17世紀の社会経済構造の地域・時代の差異を連続性と結びつけて動的に分析することが重要になっている。さらに、EUと国家、地域の補完性原理、言語的・文化的多様性と政治的・経済的権利の平等性という現代のEUのあり方を考えると、16世紀の低地地方にみられたハプスブルク朝下の皇帝、総督政府、諸州・都市当局という重層的統治システム、「言語、宗教の違いがあっても同等の権利をもって取引ができた」取引所を有しヨーロッパ諸国の商人が来訪した「受動的中心」としてのアントウェルペンの社会経済構造は、「最初の近代国家」であるオランダの形成に至る中世から近代への制度的発展という「近代国家・経済」の枠組みにとどまらず、欧州統合史の枠組みで再検討することが必要になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は中世末期から近代初頭(15～17世紀)のヨーロッパ社会経済の特徴を中心地域であった低地地方を軸に欧州統合史の枠組みで再検討することにある。同時期は、制度史的には古典学説以来の中世的規制から近代的自由への移行、また近代的国民国家、国民経済形成期としての初期的性格が目目される一方で、市場経済化ならびに地域統合化(グローバル化)の端緒として同時期を始まりとする長期的時系列分析が行われてきた。しかし、近年の研究により低地地方に中世からの連続的な発展が明らかになるとともに16世紀はヨーロッパ、国家、地域の補完関係、言語・文化的多様性と経済的・政治的共通性の並存というEUのあり方に通じる特徴が明らかにされてきたため、中世末期から近代初頭(15～17世紀)のヨーロッパ経済の特徴を低地地方の中心地としての機能と構造の変化の分析を軸に財による差異および取引における多言語性に焦点をあてて、同時期の低地地方の経済社会構造の特徴を分析した。

3. 研究の方法

本研究では、中世末期から近代初頭のヨーロッパ経済の特徴を欧州統合史の枠組みで再検討するにあたっての基礎的研究として、平成27年度から29年度の3年間で、15、16、17世紀のヨーロッパの金融・流通の中心であった低地地方のブルッヘ、アントウェルペン、アムステルダムの中心地機能と構造の変化について、取引記録、価格などの資料をもとにした穀物、熱帯産品、毛織物、美術品の流通の範囲および状態の違いに関して、流通構造および価格の決定メカニズムが異なる穀物、熱帯産品、毛織物、美術品についての低地地方中心都市と他のヨーロッパ諸都市についての資料、文献調査収集を進めると共に、

財と情報の集積と分散における空間的差異と時間的ラグの影響を含めて、それぞれの財の流通の範囲および状態の違いを通しての各時期の特徴の数量分析を行った。さらに、取引における多言語性については、その前提となる社会自体の多言語性およびエラスムスに代表される低地地方人文主義者のネットワークにも範囲を広げ先行研究を網羅的に収集検討して商人構成の差異がもたらす各時期の特徴について明らかにする手法をとった。

4. 研究成果

本研究では中世末期から近代初頭(15~17世紀)のヨーロッパ社会経済の特徴について中心地域であった低地地方を中心に欧州統合史の枠組みでの再検討のために、穀物、熱帯産品、毛織物、美術品の4種の財の流通のあり方および価格決定のプロセスについて分析し、諸都市の美術品市場のあり方ならびに美術品の価格決定メカニズム、ネーデルラント内における穀物価格等にみられる中心的都市と周辺の中小都市の間の価格動向の差異、価格決定メカニズムが異なる多元的流通構造を有する穀物と単一的流通構造をもつ特産財などの他の財の諸財および貨幣、情報の集積と分散における時間的ラグの影響について明らかにした。

価格分析は特に統計資料が限られている18世紀以前に対して、地域統合、市場化のこれまでの研究における重要な手法として用いられてきた。その分析において地域の市場化および地域間流通の進展に関して以下の3つの指標が主に用いられている。

平準化 convergence 社会経済構造の同質化・一体化(Unification)の指標

同期化 synchronization 地域の相互関係の深化(Integration)の指標

安定化 stabilization 変動幅 Volatilityの縮小 同質化・深化の指標

これまでの研究において様々な分析手法の適用が試みられてきており、現在もなお様々な手法の適用が試みられているが、その分析結果の有用性はかなり限られている。分析の難しさの一因としては価格データの代表性の問題があり、中世末期から近代初頭のヨーロッパに関して残存している価格史料は限られ、しかも、大きな地域的な偏差に加えて史料の種類の変動が存在している。

記録された価格の種類も公的価格、非市場・売買価格(地代価格等)、市場・売買価格と多様である。さらに、価格自体の意味・機能も変化し多様性がある。このことには貨幣蓄積、流通状況が関係しており、市場価格の質的变化が地域の市場化の進展の地域差とともに生じており、また、様々な価格が記録に表れることには多元的流通構造下における価格形成の複雑さが関係している。さらに、中世末期から近代においての長期的な変化

においては、通貨圏の形成(各国での貨幣鑄造、流通強制)、関税圏の形成(関税の都市税から国家税への変化、国内関税の廃止)などの近代国家形成の過程で生じる分散化・分断化の影響が存在している。

地域統合(地域間流通の進展)における財による差異が重要な役割を果たしてきたことが近年注目されるようになってきている。近年の研究で明らかにされてきたように同時期のヨーロッパの流通はスケールフリー構造をもつネットワークの多層的構造をもち、財による生産性、地域性、収益性の違い、各点を結ぶ線を通る財・情報が異なっていたことが流通のあり方に大きな影響を与えていたと考えられている。

地域による相対価格の差異の存在に基づく地域間流通の進展は、これまでの商業史研究で中世末期から近代における最も重要な変化として位置づけられてきた現象であるが、このような地域間流通のもつ地域・財についての限定性があることによる恒常性、つまり、経済構造の地域的差異を前提とした相互連関のもとでの地域間価格差に基づく恒常的遠距離貿易の存続、相対的価格差の継続がみられる。さらに地域的相互連関の高まりによる収益性差に対応した構造変化が生じていた。

生産における変化としては、相互補完的生产構造の形成ならびに生産における需給調整の開始があり、取引財の輸出・輸入地域における需給関係の変化が生産構造にも影響し、その変化は限定的ではあってもマクロレベルでの需給調整も生じていた。さらに、中世末期より美術品などの中心地における価値創造を伴う新たな生産も始まっている。流通における変化としては、取引費用の減少、収益性の変化、利益率の低下に対応する形での商業活動の階層化、地域の市場化、流通制度の発達があり、地域間流通と地域内流通の2元構造の一体化・都市間流通におけるスケールフリー構造の深化とともに、市場化の進展と平行した非公開情報・人的関係の重要性の増加と関係して社団・広域団体の形成がみられた。消費における変化においては価値情報および財の普及による需要の多層的集団化の進展があり、中央から地方、上流から下流という時間的ラグを伴う需要が形成された。

このような生産・流通・消費構造の変化に対応する形での財による流通パターンの差異ならびに価格の地域差の差異が存在していた。地域間流通と地域内流通の2元構造の一体化・都市間流通におけるスケールフリー構造の深化により、流通ネットワークは次第にハブ&スポーク型へと変化し、ハブ間の流通における中心性(ノード)をもつ都市の差異が増大し、地域市場化した地域における都市・市場の階層化が進み、価格決定機能を失う周辺都市・市場が多くなり、この時期の財による流通パターンは以下のように分類さ

れる。

・外部地域からの流入財：ゲートウェイ型の中心地から放散的流通により中心地からの漸次的価格上昇ならびに末端における価格偏差の拡大が生じ、「川上」からの地域としての市場化が見られた。なお、新たな財については価値情報の普及も放散的に生じたため、中心地からの漸次的価格上昇が生じない場合もあった。

・地域内での集積財：ステープル型の中心地への集積的流通より中心地への漸次的価格上昇ならびに末端における価格偏差は縮小が生じ「川下」からの地域としての市場化がみられた。ただし、手工業生産地の周辺への拡散に伴う「組織内」としての原料・財・資金の流通においては、このようなパターンとは異なる価格決定が見られた。

・価値観の共有が存在している「古典的」特産財：ゲートウェイ型と類似した生産地域・都市からの放散的流通による中心地からの漸次的価格上昇および末端における価格偏差の拡大がみられた。

・価値創造・受容を伴う「新規財」：生産地域・都市、輸入拠点からの不均等な放散的流通がみられ、価値情報の普及と実際の財の普及との時間的・空間的ラグがあり、流行・価値観の共有による需要の創出ならびに情報の拡散と受容には大きな地域差の存在がみられた。

・生産性格差による広域流通にのった「普遍財」：生産地域から特定の消費地域への非連続・離散的流通がみられ、消費地域における在地生産財との複合的な価格決定がなされるため、財・地域による差異・分散が大きい。

本研究で明らかにしたこれらの財の流通パターンならびに価格決定メカニズムの差異は、これまでも C.Lesger, O. Gelderblom などの研究においても部分的には考察されてきたものであるが、本研究による低地地方の中心都市の機能の変化との関連をふくめた分析は、今後の中世末期～近代初頭ヨーロッパ経済史研究に寄与する成果である、

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

奥西孝至、「近代ヨーロッパにおける中心都市の遷移と分散 - アントウェルペン、アムステルダム、ロンドン、パリ」、『国民経済雑誌』、掲載決定 2018 年度中刊行

〔学会発表〕(計 1 件)

奥西孝至「低地地方(ベルギー・オランダ)が欧州統合に果たした歴史的役割」、日白修好 150 周年シンポジウム報告第 2 部会第 1 報告、東京 2016 年 12 月

〔図書〕(計 1 件)

OKUNISHI, Takashi,
Emergence of Market Economy & Market
Integration in the Low Countries in the
15th Century. Springer, at the process of
publishing

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥西 孝至 (OKUNISHI, Takashi)
神戸大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：20211815

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

(4) 研究協力者

Blockmans, Wim
ライデン大学、人文学部、名誉教授
Lesger, Clé
アムステルダム大学、人文学部、教授
Vermeylen, Filip
ロッテルダム大学、人文学部、教授
Pasture, Patrick
ルーヴェン大学、人文学部、教授